

昭和三年一月

元旦 正月だ。昨日まで暴れ気味の天気もからりと晴れて日光さへおがむ諒闇開けの正月も何となく活気に充ちた元気溢れた正月、国旗の様子の変ったのも又一段と引き立つ。多事多端な昨年と無事すごした舎も又齢を一つ重ねた。いつまでも古き朽ちかかった因習を固持し現在の樂に満足し、現在を以って未来を夢みつゝ歩む愚の道をすて進取と飛躍、希望とを以って今年否以後末永く舎の發展を期そふ。

午前八時半一同食堂に会し雑煮餅に正月を祝ふ。久し振りの御馳走に舌鼓を打つ。十時在舎生一同先生のお宅に御年始に伺う。

学校の祝賀会に行くものあり。その後二人ほど円山に行く。夜川島氏来舎し深更までトランプに興ず。

二日 平戸君、川島君の両君は他の数名と共に十勝の吹上温泉にスキーに出発する。

同夜赤松君手稲のヒュッテに向ふ。

三日 関谷君、岩内の知人の家にスキー遠征を企つ。

六日 午前四時平戸君、川原君意気揚々帰舎さる。

七日 天気の良い日がこゝ数日つゞくので何となく気持がいら。平川君、本間君帰舎。

八日 予科の休みも今日で終った。終って見ると何となく名残り惜しい。勝手なものだ。

朝畑君、土井君帰舎さる。舎も大分賑かになった。夜雪降る。

九日 予科の第三学期始まる。約三分の二程登校せり。非常に暖く、夜半までも雪とけて雨だれる音淋しく聞ゆ。皇室、秩父宮の妃殿下として松平大使の令嬢節子様内定さる。

十日 太陽の黒点の影響か、又お日様が顔を出しすぎたのか、いやに暖くて外の雪もどんどん融け、土の表はるゝところもあり。

スキーマンの悲鳴聞ゆ。今日より食事部委員二名とも未だ帰舎されないので、各室順次に食事委員となり一号より始む。

十一日 夕方野村君帰舎さる。之で舎生十一名となる。

十三日 朝柴内君帰舎さる。

十五日 笹部君帰舎さる。手稲山へ、三角山へ、スキーの猛者は我劣らじと出掛ける。

舎生はほとんど総出なり。

十七日 中川君、莊保君帰舎さる。之で舎生全部揃ふ。田島君都合により退舎され恵迪寮にいかれる。又一人の快男児を失ふ。舎に一入の寂寞を加ふ。

十八日 大鰐にて開催された高等専門学校スキー大会に北大勢予定通り大勝せり。点数五十七点、次点早大三十七点なり。ジャンプにては断然他をリードせり、快又快！！

十九日 ピンポンを又盛んにやり出した。

かるた取る声聞ゆ。

二十一日 一日一夜降りつゞいた雪は、みどとに積って絶好のスキー日和、尚盛んに降りつゝある中を舎生ほとんど全部三角に又円山に思ひ□□にスキーを享樂せんと出づ。

何だかんだと云われた第五十四回議会も解散された。記るす必要もないけれど序でに

書いておく。

二十三日 夜決算を行ふ。一日約六十四銭にして最高二十六円余なりき。新米の委員若い割合に早く終了する事を得たり。

二十四日 ピンポン舎内大会が二月三日にある由。

二十五日 大分ピンポンをやり出すようになった。新進で意気ごみ凄じきものあり。

二十七日 今日からピンポンの夜間練習が始った。

二十八日 土井君、赤松君二日間の予定で手稲、奥手稲に遠征。

三十日 宮部先生急性肺炎にかゝらる。経過良好の由、一同安心する。

二月一日 先生の御病状、体温、脈搏共に平常の如くになられた由。

三日 午後六時より舎内ピンポン大会を開く。

紅白試合は白軍優勢なりしも遂に敗る。

メンバー左の如し。(略) 試合後、直に個人優勝戦を行ふ。戦績左の如し。(略)

優勝 柴内、二等 関谷、

大会終了後、一同シルコに舌づつみを打ちつゝ愉快に過せり。閉会午後九時半。

四日 札幌シャンツェに於て全日本スキー大会開かる。北海道断然優勢なり。例年の通り節分の豆撒きをする。

五日 跳躍スキーを見に行く。

六日 大学第十回記念式挙行さる。会するもの千二百余名、盛大なりき。終了後、記念の紅白餅を戴く。今日の休みを利用してスキーに行ける者多し。

七日 大雪降る。

午後六時半より秋田北盟寮とのピンポン試合を舎で行ふ。我軍初め不利にして、敵方の優退するもの多かりしも、断然我軍の老将柴内君の奮斗物すごく、九人を倒して遂に我軍優勝せり。之で一勝三敗となる。

メンバー及び戦績左の如し。(略)

十一日 紀元節、拝賀式あり。恒例により舎生の手稲登山あり、一行九名、天気良く非常に好成績であった。

十五日 非常なる好天気つゞき、春の来たのを如実に物語る。校内スキー大会も間近かにせまったので我が舎の選手練習に暇なし。

二十日 予科桜星会の送別会あり。盛会なりき。午後九時三十六分の列車にて我々が敬愛す秩父宮殿下御来札。直に三井倶楽部に入らる。

二十一日 午前九時、殿下本大学に御成り、学生生徒一同正門側にお迎へする。

三角山山麓にてスキー校内大会あり。秩父宮御臨席になる。御帰還の際、ジルバーションツェの方面のスロープにスキーの跡をとどめらる。親しくそのスキー振りを拝見する事を得たり。

二十二日 午後の授業なし。中島リンクにて天覧スケート大会あり。夜は盛大なるカーニバルにより御旅情を慰し奉る。

二十三日 来月七日より予科試験あること発表されたり。予科のみならず本科実科の人も皆奮斗努力す。

二十四日 秩父宮、手稻及び奥手稻に向はる。予科試験科目発表さる。

二十六日 宮部先生の御病氣全快なるも月次会なし。

二十八日 いよ□□秩父宮殿下も札幌を御立ちになるため学生生徒一同、午前八時駅前にお送りする。

三月一日 月次会がないために、牛鍋をつゝいて試験激励会あり。

二日 午前三時舎の向ひの（コート of の北側）前田、山田の両家焼失す。舎生大いに奮斗せり。舎の一室を一時山田氏の荷物の置き場所となしたり。夕方、野崎、河合、外山、八百の四氏より御礼として菓子類贈らる。

中川氏風邪の気味にて床に就く。熱三十八度五分ほどあり。富貴堂に凶書の払いをなす。宮部先生より近火御見舞として菓子沢山贈られた。

三日 札幌稀有の大吹雪一日中吹きまくる。

四日 昨日の余波を受けて相当風が強かった。夜に至りて晴れたり。皆盛んに学問をしている。

六日 本日より学部の試験始る、山田勝作氏より御礼として拾円寄附さる。

七日 予科の試験始る。久富殿下の御病氣篤しと承る。一日も早く御平癒あらん事を祈る。

八日 遂に午前六時三十八分久富殿下薨去遊ばさる。

十日 実科、専門部の試験始る。

宮部先生御病氣御快癒後の静養のためとあつて御出席なく。わずか先輩時田氏一人にて此の学年最後の月次会を開く。突然の発表で非常に困ったような人もあつたらしかつた。直に副舎長選挙にうつり、平戸君個人の立場より今度の副舎長にならないようにとの簡単な挨拶あり。選挙にうつる。

平川君 十三票

笹部君 一票

で平川君絶対多数で新副舎長となる。直に平川君の挨拶ありて後、平戸君に一ヶ年間の努力の御礼として舎生一同より粗品を贈呈せり。

舎生、交々立って演説ありたり。時田氏のお話について次回の委員選挙あり。

茶菓の饗応あり九時散会。

十一日 笹部君朝ヘルベティアヒュッテへ出発。三泊の予定。

十二日 予科の試験大部分終了。昼頃、川原、畑両君パラダイスヒュッテへ出発。一泊の予定。関谷君突然退舎さる。入舎以来満一年、常に一異彩としてその朗らかな性質にて舎の一員として望みをかけられていたのに、突如この人を失ふ。事情ありとは云ひながら惜むべし。恵迪寮に赴き、寮生活を味はるゝ由。先に田嶋くんを失ひ、今関谷君を出す。二人の快男子、入舎以来日短くして去れること、舎のために遺憾なり。

十三日 予科試験完全に終了。土井君、朝四時半の列車にて帰省さる。試験を余すは、平川、平戸、柴内、野村、赤松の諸君なり。

夜笹部君、畑君、川原君、中川君、莊保君帰舎。中川君、莊保君は本日手稲登山をされたるなり。

十四日 朝畑、川原両君帰省。汽車に乗って窓より首を出したときは、二人の茶目も流石に神妙な顔をしていた。

十五日 昼、後藤君忍路の臨界実験所に赴かる。好学心に燃ゆる君のこの行賞賛に値すべし。夜、残れる舎生宮部先生の御宅に赴く。平戸君、平川君、莊保君、大塚君、野村君、中川君夜帰省、こっそりと。

雪霏々として降り春又去れるやを思はしむ。

十六日 昼十二時八分の汽車にて本間君帰省さる。体の暇になった輩集って将棋に、行軍将棋に時を消す。六号室は集会所の如し。

野村君は百松澤山へスキーにて登行企て、朝早く出発。夜遅く帰る。

十七日 漸く一般に朝寝坊になる。野村君の如きは十一時半になるも起きず。昨日の疲れはありと言いながらその道の猛者と言ふべし。舎の一流選手たる柴内君にして、今朝は呆然たり。春日は麗らかに巷行く乙女の姿はいと晴れやかに札幌の春は近けり。

されど道を埋むる馬糞をいかにせん。正に我等の靴を汲せんとす。夕方、後藤君帰る。

余り思はしからざりし由。食事なし。

野村君はコンディション悪く遂に途中より引返せりと。スキーを折ったのは残念。

夜莊保君帰省。同じ汽車にて予科教授鈴木庄次郎氏渡欧の途に上る。

十八日 天気又良くなる。

午後三時頃赤松氏ヘルベティアヒュッテより元気な顔して帰舎。その外動静なし。

二十日 夜、大塚君帰省。

予科発表あり。本間君一番、後藤君十六番、大塚君十七番、川原君二十四番、関谷君五十九番 田島君七十番 以上一年。 莊保君二十七番、土井君十番 概して好成績なるは喜ぶべし。

平戸君の試験すむ。これにて完全に試験を終りたることになる。

午後、彦坂氏の来訪ありたり。笹部、野村両君札幌岳への出発の準備に忙しそうに見える。

二十一日 人生の一ショックにあたりて

なつかしき一年の札幌の生活をふりかへりて、一年も数年の長きに思はれ、親しき友等と別れ難く、身は離るゝとも心は決して離るゝことなし等と思ひて千々に乱る。心を慰めても涙は胸をふさげしょう、夢の中を行くが如し。あゝ離れたくない。でも自分の前途を考へ、袖振り切る思ひして。

最後にさよなら！さよなら！友の情の身にしみて有難く、もう何も書けない。

赤松速雄

赤松速雄君を送る。彼は最早札幌の地を踏むまい。そして俺達も将しく何時また会へるものやら？特に人生の無常を感ず。

夕刻、赤松を中心として平戸、平川、柴内、後藤にて送別会を開く。たとへ小人数なりとも彼のため大いに激励する所あり。

二十二日 期既に彼岸に達し、天地一として微笑ざるなきに、何ぞ北国の春の凄愴なる大いに吹雪く。舎生の食事時を除きては三人の面を並ぶること稀となる。いと淋しき。静かなり。

二十三日 笹部、野村両君山より帰舎。元気なり。夕暗を通しては遂ぞ彼等が顔を見失ひたり。寄宿舎内にへボ将棋流行を極む。

人在り、亡国的なりと。否、社交的なりと、之凡て観察眼の開き方か。

二十四日 先輩時田郇氏近く水産専門部講師として就任さるゝことを聞く。目出度し。

二十七日 昼頃、忽然として野村君帰省されたり。

二十九日 朝、平戸君帰省。舎生挙りて（但し三名なり）見送る。

三十日 朝、笹部君帰省さる。

四月一日 頓に春の近きを感じ。電車開通の結果か北五条通りの雪も大部分融けたり。

五日 本日より疊替へ開始、三日間の予定なり。

七日 夜、土井君帰舎。

八日 夜、本間君帰舎。

九日 朝、大塚君帰舎。

十日 朝、畑君帰舎。農学実科二年級前田一誠君入舎せらる。

十一日 夜、野村君帰舎。

十二日 夜九時半の急行にて柴内君を送ることとなる。突然のことにて舎生一同驚きたれど、彼の生涯に於ける光明ある歩みのために感激をもって送る。舎の名物男をまた一人失ひたり哉。

十三日 予科（農）一年級広瀬角治君入舎せらる。

十五日 珍しき快晴なり。気も活然として植物園に転がる者多し。

十六日 予科（農）一年級村津俊太郎君入舎せらる。

十七日 予科（農）一年級三島洋平、高橋明両君入舎、「ノイ」の白線帽に嬉々然たる新入生を見受けること屢である。去年の今日を憶ふて転々感慨に絶えず。

十八日 灰色ノ陰鬱ナ感ジノスル天気ダ、併シ春浅イ北海ノ気分ガ濃厚ニ感ゼラレル。新入生学校ニ出頭。

予科（工）一年級坪田進太郎君入舎。彦坂君弟君の入舎に付き来舎、予科土木専門部一年級彦坂重保君入舎

十九日 本日、新入生徒入学式中央講堂ニ於テ举行サル。午後六時ヨリ中央講堂ニ於テ「秩父宮殿下スキー御練習」ノ実況ノ活動写真等ヲ見ニ舎ヨリ行ク物大部多シ。

二十日 天大イニ寒シ。朝来ヨリ霰降ル。

二十一日 ハッキリシナイ天候、時々雨アリ、秋ヲ思ハセル、冷氣膚ニシム。午後工学部ヨリ、ローラーヲ借用シ、テニスコートノ修繕ヲナス。見違エルホド立派ニナッタ。

午後七時ヨリ十二号ノ室ニテ土井君ノ戴冠式、茶菓ヲ喫ス。

二十二日 午前コートノラインヲ引ク。昼食後テニスヲナス。野村君朝奥手稲登山ニ出発ス。午後七時ヨリ四月ノ決算ヲ行フ。一日分五十三銭、最高額二十二円六十五銭なり。

午後平野君来舎。

二十三日 天候依然トシテ陰悪ナリ。各地ニ吹雪アリ、夜ニ入りテ風神猛然トシテ其勢ヲ運ブ。九時前後停電ス。

二十四日 天候回復ノ兆シ現ハレズ、今朝ノ“北海タイムス”ハ青函連絡船ノ7時間ノ大遅延ト各地ノ電信ノ不通、停電吹雪ヲ報ズ。野村君一尺ノ積雪アルヲタ刊報ズ。

二十五日 天候回復ノ緒ニ付ク。ウィルキンス大尉北極横断ニ成功ス。

二十六日 中川君朝ノ汽車ニテ帰札、甥ナル人ト共ニ来舎サル。中川君退舎サル。

二十九日 天長節。

笹部君ノ誕生日ナリ、赤飯ノ馳走アリ、夜誕生祝ノ汁粉アリシモ御本人ノ笹部君不在ナルハ遺憾ナリ。広瀬君手稲登りヲナス。野村君百松沢山ニ登リ夕刻帰ル。

五月五日 今日ハ五月節句ナリ、処々ニ鯉ノボリ、鐘鬼大臣ヲ見ル。内地ノ如ク感ジノ出ナイハ遺憾デアル。而シ之モ年齢、境遇ニ依ル事ガ大ナル故デアロウ。

今夕、新入舎生歓迎会ヲ兼ネテ月次会ヲ開ク、委員左ノ通り

土井、畑、本間、後藤ノ諸君

午後五時半ヨリ本間君ノ挨拶ノ下ニ晚餐始ル。七時半ヨリ歓迎会ヲ開ク。先輩ノ御出席下サレシハ次ノ方々ナリ。舎長宮部先生、奥田氏、亀井氏、時田氏、鈴木先生、多勢氏。

一、開会ノ辞

一、平川副舎長ノ挨拶

一、新入生ノ自己紹介ヲ兼ネテノ挨拶

前田君、広瀬君、村津君、三島君、高橋君、坪田君、彦坂君

一、旧舎生ノ歓迎ノ辞及ビ自己紹介

一、各部員ノ各部紹介

先輩ノ挨拶

多勢君、改築以前ノ寄宿舍ノ事情ヲ述ベテ、寄宿舍ノ現在ノ甚ダ粗悪ナルヲ云ヘル者ニ痛棒ヲ喰ハシ、往時ノ予科ノデカタン的氣質ヲ述ベ、喫煙、飲酒ノ誘惑ヲ如何ニシテ避ク可キカヲ述ベ、且ツ寄宿舍ノ眞ノ目的ハ如何ナルカヲ論ズ。

時田君 新シサト、親シサトニ就イテ述ベ、新シサヨリ親シサニ入ル道程ヲ述ブ。即チ新シサガ失ハレテ心ニ不満ヲ感ズル時、更ニ一歩突キ進ミテ親シサヲ得ベシト説キ、且ツ自己ノ体験ヲ述ベ、「人ヲ見レバ友達ト思ヘ」トラテン語ヲ引證シテ降壇。

鈴木先生 寄宿舍ノ精神ノ了解シ得テ、云ヒ表シ難キ事ヲ述ブ、種々説ク所アリ。

亀井氏 又寄宿生活ノ制慾ヲ必要トスルヲ詳述ス。

奥田氏 又有益ナル言アリ。

最後ニ舎長宮部先生ノ御話。最近ニ於ケル御病ニ於テ得タル体験、ホトンド奇蹟的ニ命ヲ全ウシタルハ、推測スルニ年来ノ禁酒禁煙ニ依ルトシ、且ツ例ヲ引キテ説明セラレ、前記先輩ノ寄宿ニ対スル精神ヲ綜合シテ述ベラル。

畑君ノ閉会ノ辞ニ依リ会ヲ終ル。

莊保君九時ノ急行ニテ帰舎サル。例ノヘボ抜キハ先輩新入舎生ノミックスニ対シテ旧舎生軍、三対ニニテ先輩新入舎生ニ花ヲ持タス、終リテ寄宿ノ舎則ヲ朗読シテ諸種ノ注意ヲナシ、舎費三円値上ゲノ件ヲ可決シテ散会ス、時二十一時。

六日 野村君、川原君百松沢山登山を決行ス。

午後三時ヨリ中島公園ニ於テ独乙巡洋艦柏林号ノ演奏会アリ、大塚君等出カケル。

平戸君ヨリ筍ヲ送ラレタリ。

八日 予科櫻星会新入生歓迎会アリ。夜九時平戸君帰舎セラル。

十日 春眠不覚曉——春ノ朝寝ハ快良イ、吉例ノ円山ノ桜見物ノ為ニ、早クモ五時ニ皆起サル。舎生十六名（土井、莊保両君事故不参）眠リ不足ラシイ顔付デ五時半出発、春朝ノ快キサワヤカナル光ト空気、新緑トニ元氣付ク、花ハ今盛りデアル。内地ノ桜ニ比ス可クモナイガ矢張桜ダケアツテ氣持ヨイ。但シ、ローン上塵紙等種々雑多ナルモノ散乱シテ美觀ヲ傷ケルコト甚大ナリ。

同胞ノ公德心ノ欠如ヲ明瞭ニ物語ル。七時半全舎生帰舎。午後雨。

十一日 文武会ノ新入生歓迎遠遊会ハ十四日第二農場デ举行サレル筈デ、今年ハ例年ノ型ヲ破ツテ、ビール、酒デ大イニヤル予定デアッタガ高杉予科教授ノ反対デ、早朝之に賛同シテ取止メトナル。今日暑キマデノ好天気、春季大掃除ヲナスモノ七号、九号、十一号。

十二日 文武会歓迎会ノ酒問題ハ、江口書記官ノ二枚舌ニテ益々騒ギ大トナル。文武会委員ハ総辞職ヲナシ、且ツ江口書記官ニ辞職ノ歡告ヲナス。

今日稍曇リ勝ちノ天気ナルモ明日遊バンコトヲ考ヘテ皆大掃除ヲ決行ス。残サレタルモノ五号、十二号ノミ。

十三日 寝ツツ聞ク春雨ノ音ハ此ノ上ナク優雅ダ、アタリハ静カデアル。此ノヨウな状態デ一日ユックリトシタ気分ニナツテ静カナー日ヲ送りタイ。平戸、本間、大塚、彦坂君真駒内ニ遠足ス。土井、畑、川原君ハ豊平、中島方面ニ出発ス。其ノ多或ハテニスヲナスモノ、各自好メル所ヘト出掛ケル。舎は静カトナツタ。

十五日 近来稀ナル絶好ノ天気デアル。「ソヨ」トダニ風ナク、浮雲一片ヲ見ズ、眞ノ日本晴ナリ。今日植物園ニ寝コロブ者甚ダ多シ、独乙鈴蘭已ニ花ヲ付ク。

本日午後三時半ヨリ中央講堂ニ於テ文武会委員辞職経過報告会アリ。後先ヲ変ジテ学生大会トナシ「文武会ノ自主化、江口書記官ノ辞職ヲ要求シ、集会ノ自由、言論ノ自由等ヲ決議シ、実行委員二十五人ヲ挙ゲテ散会ス。

十六日 風強烈ニ吹ク。昨日ニ比シテ甚シキ変リヨウナリ。平戸、平川君等大ノ男一時間余ヲ要シテ兎一匹ヲ捕ウ。蓋シ食料品在中ノ戸柵ヲ襲撃サルモノナリ。

「吾界大思想全集」第十四回配本サル。

二十日 風稍強シ、本日ハ恵迪寮記念祭ナリ。

朝来ヨリ出掛ケル者多シ。平戸君、平野川島両君ト定山溪ニ遠足ヲナス。広瀬君今日合宿ヲナス。

記念祭ニ於ケル各部屋ノ裝飾中最モ痛烈ナリシモノニ、題シテ「北海道ノ女学生」トシテ、「立テバ」トシテゴム靴ニ大根ヲサシ、「スワレバ」トシテカボチャヲ置キシモノナリ。其他面白キモノ、皮肉ナルモノ等々ナリ。

二十一日 夏ヲ思ハス暑サナリ、風無ク雲なし。

二十二日 本日予科二年、月寒ニ於テ実弾射撃挙行ノ筈ナリシモ、七時頃ヨリ雨降りテ中止トナリ、昼食ニ冷エタル握飯ヲ食フ。

午後六時ヨリ本月ノ決算ヲ行フ。一人一日宛五十四銭弱、先月ト大差ナシ。合計一人一ヶ月二十一円五十四銭平均ナリ。

二十三日 朝来、曇リ勝ナル天候ナリシモ漸次良好トナル。予科、実科、専門部二年八月寒ニ於テ実砲射撃ヲナス。

午後三時半ヨリ医学部南講堂ニ於テ、オリンピック出場スキー選手ノ報告会アリ。

本日ノ北海タイムス紙ハ稀代ノ英才、野口英吉博士黄熱病ニテ西部阿弗利加ニ於テ不幸永眠セラレシヲ報ズ、独リ我国ノミナラズ実ニ吾界ノ損失ナリ。

二十四日 月次会委員左ノ如ク発表サル。

平戸君、川原君、前田君、彦坂君

予科、実科ノ射撃演習、莊保、野村両君出発ス。

二十五日 月次会挙行。

午後六時ヨリ晚餐、七時半ヨリ川原君ノ開会ノ辞アリテ月次会開カル。次イデ平川副舎長ノ感想及ビ在舎諸生ノ演説アリ。

莊保君 近来殊ニ今年ノ運動不振ヲ慨ク、之ニ賛同スル者多シ。

本間君立チテ、之ハ自分等中堅ノ責務ナリトナシテ大イニ奮起センコトヲ誓ウ。

大塚君、運動ノ不振ハ運動部長ノ不徳ノ致ストコロト謙遜セラル。

平戸君ハ「感じ方」「見方」「聞き方」ニ付キテ論ズ。

笹部君、先日ノ学生大会ノ印象ヲ述ベテ、自己ノ現在ニ不満ヲ感ズルモ、他ヨリ見ルト之ガ甚ダ羨シキコトナリトナシ、徒ラニ親ノスネバカリ嚙リテ安逸ニ随スルヲ恥ヅト結ブ。

多勢君、巧ニ諧謔ヲ弄シテ寄宿ノ生活ヲ語り、藻岩山ノ狸征伐ヲナス。

莊保君、春休ミ中ニ於ケル伊豆、九州地方ノ旅行ニ付イテノ感想ヲ語り、盛ンニ伊豆行キヲ勧誘ス。

時田君、例ノ如ク熱アリ意味深長、吾人ヲシテ考ヘサス可キ事実ヲ話シ、曾ッテ大学及

ビ予科時代ニ、教授ノ講義ノ平凡サヲ思ヒテ、物足ラザルニ、計ラズモ自分ガ其ノ位置ニ立チタルコトニ驚キ、人生ノ如何ニ進ム可キカ甚ダ迷ヒ易キヲ説ク。

平戸君ノ閉会ノ辞ニ依リテ散会シ、次イデ東西對抗ヘボヌキヲ行ヒ大イニ奮斗スルトコロアリシモ遂ニ東側ノ勝ニ歸ス。本日舎長宮部先生所用ニテ御不参ナリシハ遺憾ナリ。

二十七日 文芸部図書ノ整理ヲナス。本日朝来ヨリ、ボールノ音盛ンナリ。曇リ勝チナル、ドンヨリシタ、テニス日和ナリ。実科、専門部對抗陸上競技行ハル。水産三十数点ヲ占メテ優勝ス。次位昨年ノ優勝農実、三位林実、土木ハ末位ヲケガス。

尚二十六日ノ札師対予科ノ陸上競技ハ三十五対二十七ニテ予科大勝セリ。

二十八日 依然タル天気、低気圧ノ停滞セル如シ。本日初メテ郭公ノ音ヲ聞ク。

六月二日 予科対高商ノラグビー試合ハ本日午後三時半カラー中グラウンドで行ハレタ。

今年外人船員チームニ挑戦シテ勝チ、北中ニ大勝セル高商モ予科ニ対シテハ全ク勝味ナク遂ニ二十三対零デ大敗シタ。

六月ノ声ヲ聞ク、已ニ夏ダ。燕モ輕快ナ姿ヲ現シタ。此頃ノ手稲ノ夕焼殊ニ良シ。

本日莊保君手稲山ニ登ル。三島、村津、高橋、坪田四君定山溪温泉ニ旅行ヲ企ツ。元氣旺盛ニ出発ス。先月二十日ヨリ合宿中ナリシ広瀬君、本日合宿終了シテ元氣デ歸舎ス。

合宿前ヨリ一層色黒クナリタリ。

三日 日曜ノ声ヲ聞キテ飛出ス者多シ。平川、大塚、本間、川原、広瀬君ハ島松エ鈴蘭狩リニ赴ケリ。後藤君野幌へ、午後六時頃皆歸舎。定山溪行ノ四君元氣ニテ歸ル。

四日 本日高橋君柔道部ノ合宿ニ行カル。

八日 内地及ビ道内各地ノ男女中等学校ノ修学ノ為ニ札幌ニ来レルモノ甚ダ多シ。

本日、田中首相上野駅ニテ狙撃ノ報アリ。

九日 札幌神社祭礼近ク、大通リニハ例年ノ如ク曲馬団等ノ興行モノ多ク小舎建設中ナリ。

十日 朝来ヨリ絶好ノ天気ナリ。平戸君乗馬ニテ島松ニ赴ク。本間錢函へ。

午前十時ヨリ本学トラックニテ、中央大学対北大ノ陸上對抗試合アリ。北大奮戦惜クモ二点半ヲリードサレテ敗ル。中大二十九 1 / 4、北大二十六 3 / 4 又同ジク九時半ヨリ予科対高商ノ弓道戦、本学道場ニテ举行サル。

一〇一対九十八中ニテ予科惜敗。

文芸部ハ牧笛ノ原稿ヲ切ル。一般ニ集リ良好ナルモ、通り一辺ノ御座ナリ式ノモノ多シ。高橋君合宿終了シテ歸舎ス。

十一日 藤、つゝじ、昇り藤、けし、ぼたん今盛りなり。アカシア益々緑を加ふ。

十二日 風無く天気愈々良し。

十三日 朝来より陰険なる天候は遂に降雨となる。雨に加えて風強くして暴風雨の気味あり。夜半、風益々激し。

十四日 夜来の風雨名残りなく晴る。樹々は其の粧を新にせる如く、其の葉茎、塵を流し

て緑したたるばかりなり。本日より札幌競馬始る。北五條通りは自動車の往来織るが如し。砂塵もう□□、道路亦凸凹を生ず。

今晚より札幌神社祭礼、各通りに神燈あり、祭気分溢る。

十五日 札幌神社祭礼にて予科ボーイ授業をエスケープするものあり。大体午前中の授業ありしのみ、今夕祭典に付き赤飯の馳走あり。

十六日 朝のうち曇り、其中にパラ□□と降る。本日は予科対高商の野球戦あるはずにて皆授業をもらふ。十三時発の汽車にて征途に上る。而れども生憎の雨にて遂に延期となる。

十七日 低気圧停滞せるために梅雨の如き現象を呈す。降りみ、降らずみ、終日陰気に過ぐ。朝、二六館前にて鉄道自殺をせる女あり。

十八日 陰鬱なる空、けし咲きて幾分の晴れやかさを思わす。

十九日 朝来、陰雨肅々たり、夜九時の列車にて自殺をせる男あり。

二十日 予科の試験期日発表さる。予科ボーイ一斉に緊張す。

二十一日 本日は旧暦の五月の節句か、湯屋にては菖蒲をなす。

二十二日 予科試験科目日割発表さる。コンデを取らざるよう此の十日間多いに奮斗せんことを希望する。

夜決算をなす。一日六拾錢当り、一人二拾参円九十五錢なり。本日の決算は従来ノ記録を破りて三十五分に終了せり。決算終りて茶菓あり、本日新年初めてのストロベリアの馳走あり、部員皆七十五日生き延ぶるか？

二十三日 天気稍良シ、本行ハレタ運動競技左ノ如シ。

東北大一本学 テニスハ三〇ニテ東北勝

本科一北中 野球三〇A一北中大敗

札幌一予科 野球五〇 予科敗

各科対抗水泳競技ハ(一)予科、(二)本科、(三)実、専ノ順序ナリ。夜七時ヨリ中央講堂ニ於テ音楽会(文武会)開催サル。寄宿舎ヨリ多勢、平川、野村君出演サル。

二十四日 今日初メテ良イ夏ラシイ感ジノスル天気ニナツタ。正午頃ヨリ多勢、時田両氏来舎シテ、テニスヲナス。

本日左記ノ書籍ヲ購入シタ。

佐々木信綱著 萬葉漫筆

鳥井龍蔵著 満蒙■查

芥川龍之介著 侏儒ノ言葉

七時頃、本学期最後ノ月次会ヲ開ク

委員左ノ如シ。

笹部君、土井君、野村君、前田君

笹部君アッサリト開会ノ辞ヲ述ベラル。時ニ宮部先生、亀井、今井両氏御出デニナル。

新シイ先輩トシテハ多勢君ノミ、時田君ノ御出ニナラナカッタコトハ淋シイ。

副舎長ノ挨拶ニツイデ前田君意見ヲ述ベラル。次ニ莊保君夏休ミニハ大イニ遊ビテ身体ヲ鍛ウ可シト云ウニ、土井君大イニ勉強ス可シト論駁ス。畑君立チテ中庸ヲ説ク。

笹部君、個人主義エゴイズムノ差異ニ付キ述ブ。多勢君又笹部君ノ意見ヨリ、個人主義ニ付キ述ベラル。

久方ブリノ今井氏ハ、過去三ヶ月ホドノ病氣ヨリシテ健康ノ尚ブ可キヲ説キ、又見舞客ヲ四分シテ病人ヨリ見タル意見ヲ述ベラル。亀井氏ハ試験ノコトニ付キ述ベラレテ種々笑ハス。

先生立チテ試験ノ注意、答案ノ話ナドヲナサレ、又将来ナスアラントスルモノハ大イニ今ニ於テ之ガ準備ヲナス事ノ必要ナルヲ説カレ、夏休ミニハ自己ノ志ス、クラシカルナ書籍ヲ熟読玩味ス可シト教ヘラル。

野村君ノ閉会ノ辞ニ次イデ、アイスクリーム、菓子ノ馳走アリ。来学期ノ各委員ノ選挙ヲ行ヒ十時散会ス。

二十五日 夕食後、先日強風ノタメ倒レシ、アカシアノ樹ヲ起ス。途中マデ立テテ中止ス。蓋シ其以上ハ甚ダ困難ナレバナリ。イツモ感ズルノダガ、此ノヨウナ場合理論家多クシテ実行家少キハ慨歎ノ至リナリ。 夜、苺ノ馳走アリ。

二十六日 好天気連続ス。「アカシア」ノ花散リ始ム。

二十七日 本学ハ東北帝大ト野球試合ニ於テ接戦、結局十一対十二ニテ敗ル。試験切迫ス。授業ホトンド無キクラスアリ。

二十八日 本日ヨリ土木専門部ノ試験始マル。彦坂君試験ノ先駆ヲナス。

七月一日 試験マデ余ス所此ノ日限り、大イニ頑張ル可シ。

七月二日 愈々試験始まる。晝食はコンデの声で賑はふ。

七月三日 二日目、幾分の落付を見せる。

本日四号の住人、十一時まで寝過し、二、三時限の授業を受け損ふ。

七月四日 試験も中途、而も已に帰省の事を考ふるものあり、即ち新入生の一隊なり。

七月五日 予科、農三年試験終了。莊保君得々たり。土木亦試験終了。

七月六日 已に切符を購入したるものあり。早くも帰省気分溢る。前田君午後七時帰省。

七月七日 本日は七月の節句なり。何処にも其の祭りをなす所あるを見ず。試験本日をもって全部終了。莊保君、村津君、広瀬君、坪田君、三島君十二時の汽車にて帰省。

七月八日 試験終了と同時に六人一時に帰省したるため、舎にはかに淋しくなる。彦坂君前日より“ろくまく”の気味にてふせる。

本日発熱甚し、案ずるほどの事なし。

高橋君ドローを畑氏に依頼して一日を費して書上ぐ。而して高橋は午後六時の汽車にて帰省の途に着かる。但し彼は、近海郵便に乗りて樺太方面に至り、而る後、帰省するなり。

七月九日 本間君、本日朝七時三十分の急行にて帰省さる。又野村君二時発にて旭川に帰へらる。

七月十四日（土）

学期末舎生の動静左の如し

| 人名 | 出発期日 | 居所 |
|-------|-------|-------------|
| 前田一誠 | 七月六日晚 | 岐阜県関町末広町 |
| 三島洋平 | 七月七日朝 | 朝鮮釜山大戸町一 |
| 莊保忠三郎 | 〃 | 不定 |
| 広瀬角治 | 〃 晝 | 大阪市住吉区阿倍野町 |
| 坪田進太郎 | 〃 | 鹿島市幟町六八 |
| 村津俊太郎 | 〃 | 兵庫県加古郡二見町 |
| 本間憲一 | 七月九日朝 | 新潟県南蒲郡三條町 |
| 野村虎男 | 〃 晝 | 旭川市外神居村 |
| 高橋 明 | 七月八日夕 | 東京市赤坂区青山南町 |
| 畑 賢二 | 七月九日夜 | 東京市牛込区市谷仲之町 |

| | | |
|-------|--------|-------------|
| 川原鳳策 | 〃 夜 | 不定 |
| 大塚憲郷 | 七月十三日晝 | 千葉県長生郡茂原町 |
| 後藤源太郎 | 七月十日早朝 | 大分県北海部郡小貸井村 |
| 土井恒喜 | 〃 夜 | 函館市湯ノ川通七 |
| 平川好文 | 七月十二日夜 | 東京市芝区三田台町 |
| 彦坂重保 | 七月十三日晝 | 入院 |
| 笹部三郎 | | 東京市外洗谷町 |
| 平戸勝七 | | |

試験終了後、ずっと加減が悪くて静養していた彦坂氏遂に経過悪しく昨十三日、大学病院中川内科へ入院せらる。病名、急性肋膜炎。恢復の速かならんことを祈る。

大塚君、彦坂君去って遂に平戸君と笹部君との二人切りとなる。共に各々の志す道に精進さる。但し平戸君は学問に、笹部君はテニスに。

七月二十一日（土）

彦坂君はその後経過よき由、元気だから、おきに退院出来るようになるだろう。

二人キリで静かな生活を送っている。変化がほしいような気がする。うちへ帰りたくなる。

自然は萬物を美しくすることを忘れない。

醜くするのは人間だけだ。一昨日の豪雨で水のたまった前の池に、二羽連れ立ったセキレイが来て遊んでいる。雀が来ては水を浴びて嬉々としてたはむれている。窓から眺めていたときに、水が干上って了ってから、こんなに平和な美しい池の姿を見たことがない。無心に遊ぶ小鳥の群を見ていると、心がすがすがしくなるのを感じる。

舎の前のローンの上に憩ふ人、電線工夫が来る。道路工夫が昼寝をする、馬方たちが餅

を食っている。昨日は又、家族連れの一団が来て弁当を開いて楽しそうに遊んで行った。今も又娘と小さな男の子を連れた母が休んでいる。そんな人達の姿を見ると嬉しくなる。ただ池の水のないのが風致を害する。残念なことだ。前の庭を美しくすることは、知らず□□□の中に随分よい結果をもたらしているのじゃないかとも思はれる。

二十日晚より川島君、当分夜食を食ひに来るとのこと。

昨晚、亀井さんが舎へ来られる。晚餐を共にし後、七号室にて十時半頃まで話す。今後も時々来られる由。

今までに受け取った為替 坪田君、土井君

帰省した人達から在舎生へ、時々便りがある。随分嬉しい。便りがない人は遊ぶのに忙しいのだらうと思ふと、その姿が想はれて微笑まれる。

八月二十一日 当地方は近来稀なる旱魃にて殆んど二ヶ月間一適の雨を見ず。舎の前庭の美しきローンもいまや見る影なく、植物園内の大木さへ次第に枯死せんとする有様、飲み水も不足して来た。恐ろしや。平川君帰舎す。

八月二十五日 広瀬君帰る。余りゆっくり帰学する人の気心が知られぬと云ふ。当舎にしては甚だ奇特なる哉。岩見沢の笹田氏来訪さる。

八月二十七日 本間君帰省

八月二十八日 三島君帰舎。壁の修理をなす。

八月下旬の特報は時田郁氏の結婚せられし事なり。

八月二十九日 前田、莊保君退舎。莊保君退舎す。

八月三十日 大塚、畑、村津、高橋の四君大挙帰舎す。舎も賑かとなれり。

八月三十一日 土井君（自分で「君」を附すのは感心しないが、日記を公平ならしむるため敢てかゝる客観的呼称をなす）朝十時帰舎、待ちあぐみたる慈雨沛然として至る。

雨中の新緑麗し。夜九時半の急行で坪田君帰舎さる。

九月一日（土）細雨終日煙りたり。今日は関東大震災の五周年記念日、加え、何処かに御祭りがあるため煙火が随分上った。夜の急行で後藤君帰舎。予科ボーイの精励賞すべし。

九月二日（日）朝少しく曇り、少しく降りたり。午後は少しく晴れて、重苦しい燻銀の雲の裂目から蒼碧の空が時々顔を出した。陰鬱なる日曜日！舎生の元氣頓と上らず。

三日（月）予科本日より正式に授業会し。天候は相変らず余り良しからず。テニスの練習開始。夏期二ヶ月ばかりの間にコートは驚くべきほど荒廃して、何者かのためにポール一本根こぎにされたるは痛恨事なり。

物置に鉄棒一本を発見し、器械体操をやらんと主張する傾向表る。金棒は相手いらずのスポーツとして最良なり。

四日（火）快晴、暑し。夕方、ネット用ポール材を取りに行く。三寸五分角九尺、九十銭也。

六日（木）天理教北海道大会とかで二万の信徒が札幌に集ったので雑沓すること甚し。

朝、平川、前田、土井の三君ポール（ネット用）を立て、ポプラの移植をなす。後、松島屋で慰労ありたり。夜は高勇吉、同夫人ヘティの音楽及舞踏の会あり、舎生中ゆける者多し。夕立沛然として至り涼味湧く。

七日（金）快晴。暑し。本日は多端なる一日なりき。コートの上盛、囲の杭打、網（針金）の修繕等を全員こぞりてアルバイトし、夕食までかゝりたり。アルバイト後の夕食の美味さ！労働の尊さ、眞意を味覚で知りたり。午後七時より七、八月分の決算を新期委員の手でなす。八月の残留組の食費が一日三円になるので大分問題となり。

結局、非残留組が一人二円宛出費し、舎より十八円余を補助することにして解決せり。

決算後水瓜を食ひつゝ賄制度改良、燃料問題等に関して懇談せしも具体案を得るには至らざりき。

八日（土）空に浮雲多けれども晴朗なる一日なりき。晝食後一斉に部屋換へをなしたり。

夕食後、コートの上を針金を廻したり。

蓋し昨日の残業なり。コートの上修繕成りしたためかテニス熱の復活せるは喜ぶべし。

夜は各々好める部屋に集ひて、訣別及び **new couple** の前途を祝福するため雑談等をなしたり。

（今日、新しく此の拾号室に移り来りて、独居の午後十一時半、昔なつかしき墨の香に浸りつゝ之を記しぬ）

九日（日）曇天 そろ※※陰惨なる風吹き初む。朝の急行で川原君帰舎。十六日に舎内テニス大会を開く旨発表されしためか、テニスの練習をなす者多し。高橋君恵迪寮柔道部屋に入るため夕食後退舎せらる。予科は相変らず雑談に賑へり。夜半より強風吹き出したり。明日は二百二十日とか。

十日（月）朝雨少しく降りたれど午後は曇り。移植せるポプラ遂に枯死し終はんぬ。

残念なり。本年度記念祭歌、々詞募集広告を掲示せり。（追記、枯れしと思ひしは誤りにして根はつきいたり。）

十一日（火）曇。本日より学部の授業始る。

大思想全集の八、九月分二冊配本さる。

十二日（水）笹部君、短く太き事相変らずして帰舎。（朝の急行で）いかにも秋らしき雨降りたり。近頃特筆大書すべき事は（一）朝寝する者なき事。（二）ゴンタのそのあとを絶ちたる事なり。

十三日（木）雨終日降りたり。ずっと昔から残っていた、所寄留退去届合計七十有枚を副舎長平川君と土井君とで書き終へたり。

昨年以降に入舎したに人々寄留届用紙を配布せり。夕方先輩笹田君来舎、御土産の菓子をパク付きながら六号室に雑談せり。

十四日（金）ほんとに秋らしくなった。夜遅く平戸君帰舎。

十五日（土）明日庭球舎内大会があるためテニスの練習をなす者多し。夕食後テニスコートの手入をなす。

十六日（日）夜来の雨のためコートに水が一杯たまったが、朝食後全員総出動で排水及土盛作業をなし、試合出来るぐらいになった。九時半、東西対抗試合をなし、東側の勝利となる。晝食後一時より優勝試合をなす。抽せん組合せ及戦績左の如し。（略）

試合後シルコの饗応ありたり。

十七日（月）めっきり寒くなった。夜亀井先輩より西瓜二個を惠贈された。中山峠や空沼の万計沼畔にヒュッテが建つそうだ。スキー党万歳である。

十八日（火）相変わらず寒し。風邪流行の兆あり。舎生中鼻声の者、二、三名を数ふ。

注意すべき事なり。高松宮よりの御下賜金による「北海道資源開発に関する論文」募集さる。第一回の栄冠を担うは誰ぞ？ 夜、野村君帰舎。相変わらず黒きは慶賀すべき。

二十一日（金）予科櫻星会秋期例会。

「青年寄宿舎アマチュア競技会」の会員募集広告及競技細則発表さる。創立委員は川原、畑、本間の三君。

二十二日（土）午後二時半の汽車で定山溪へ秋期遠足をなす。残留組は前田、三島、土井の三君。

二十三日（日）午後より終日雨降る。二中グラウンドで全道ホッケー大会あり。決勝で北大は苫小牧工業に四一〇で再び敗る。

三時半頃、皆元気で帰舎せり。昨夜はうんと騒いだとか。

二十五日（火）北海名物、秋雨時折猛然と至り天日ために薄暗し。天候不良のため舎生中腹をこわす者多し。今朝豚を売り払へり。三頭で六十余円とか。

決算をなす。一日の食費六十八銭なり。

二十七日（木）秋季大掃除をなす。予科発火演習。

二十八日（金）秩父宮の御成婚の日なり。スキー部は集会所にて祝宴をはり、殿下の活動写真を映写して、その御徳を慕へり。

夕食後、月見の御馳走あり。それを食ってから大茶目、小茶目無慮七名、平川副舎長をリーダーとして大学の農場を襲撃し、大根、カボチャ、トマト等捕獲して凱歌を挙げ。

夜半に至りて月冴え、多感なる遊子をしてハイムヴェーに泣かしむ。

二十九日（土）月次会は先生の御都合により明日に延期。思想全集 10 回配本。前月からの残り三冊分を支払ふ。

三十日（日）全道都市対抗庭球大会北大コートで催され札幌組優勝せり。予科はテニス戦を高商に敗る。

本日今学期最初の月次会開催。委員、大塚、三島、広瀬、村津君。五時半晚餐会。フレッシュマンの手になる支那料理に舌鼓を打つ。七時より、先生、亀井先輩、多勢先輩を迎へて月次会に入る。村津君、開会の辞を述べ、副舎長ある寄宿舎を參觀して感ぜし所を述べ、いくら設備がよくても舎生が一致共同しなければ駄目である。而して談はエコノミイの方に及び、舎生が浪費をつゝしんだなら、もっと経済的にやってゆけると述べる。

次に笹部君、舎生がケンカした時の態度及解決法について語る。

野村君、満州旅行談。而してその感想を述べ、準備なしに行ったから余り得る所なかった旨を話す。

平戸君、同じく満州旅行談。而して談は日支外交に及び、支那人はやはりどこか偉いところがあると褒める。而して田中現内閣の武断、干涉政治を非難して降壇。

土井君、秋にもかゝらず若き舎生のメシの食ひ方が少いと慨嘆す。畑君、三島君夫々の立場より抗弁し、土井君再び立って終りに妥協の言辞を弄す。前田君、又土井君を反駁して降壇。

多勢君、スポーツ礼讃をやり、英国の議会がスポーツマンシップによってフェアプレイをやっている事を説く。

亀井氏、昔ある女人が、他の舎生のテニスをやっているのを見て「親不孝な事をやっている」と云ったといふ事から説き起し、スポーツの必要なる事を力説さる。

最後に先生立たれ、今不眠症にかゝっていて、諸君の話中二、三回舟を漕いだが、皆さんの話は皆よくきいて判っている旨述べられ、舎生はなるべくケンカをしないように、而して云いたい事は、かゝる公開の席上で述べて、なるたけ後に残さぬようにせよと話さる。後茶菓の饗応ありて議事にうつる。

提案左の如し。

- 一、石炭ストーブにするかコークスにするかの件。絶対多数で石炭をたくことになる。
 - 一、一号及十二号の掃除を各部屋で負担する件。
 - 一、消火器を毎秋演習するの件。
- 共に可決。

10月一日 曇り勝ちなり。気温低下す。秋の気配を感ず。

六日 本日の札幌ラグビー大会に北大A41-3北大Bにて北大A大勝す。広瀬君予科フレッシュマン対一中の対抗陸上競技に出場予科大勝。本間、川原、村津、三島、坪田君は手稲登山をなす。

七日、六日手稲ヒュッテに一夜を過したる前記一行、午前帰る。予科対高商剣道試合は、予科軍力戦し遂に大将を残し快勝す。

午後二時より対高商野球試合あり。天候険悪、時々小雨ありてグラウンドコンディション悪し。小樽高商は本年北海道、東北の覇を握りしもの、又予科投手堀越の怪腕と、札鉄を破りて意気大いに揚れるものなれば、実に興味ある試合なり。高商の専攻に試合開始、予科最初より敵を圧迫す。的もさるものなれば徐々に試合は白熱し、接戦に次ぐ接戦を以てす。予科高商に勝る実力を有しつつも遂に五-四の接戦を以て惜敗す。

高商の老練に対し、予科の若き事これ敗因ナランカ?本日必勝を期せし試合をロストせしなれば事皆啞然たり。

八日 予科授業あるもの殆んどなし。雨ふる、激し。

十一月三日行はるる第三十一回記念祭委員左の如く発表ありたり。

饗応係 笹部、畑、後藤、広瀬、野村（兼任）

余興部 土居、川原、村津、三島、坪田

装飾部 平戸、大塚、本間、前田

庶務係 平川 野村

『記念祭に関して』

「当舎の第三十一回記念祭は来る十一月三日挙行致すに付き、舎生諸君の御尽力を乞ふ。尚本年は御大典奉祝の意をも含め万事盛大なるべし」と

九日 気持よく晴る。予科、実科、専門部の発火演習、新琴似にて挙行さる。

十日 本日は予科、実専は慰労にて休みなり。

十三日 本日より国際水泳大会玉川プールにて行はる。宮下千五百米にてアルネボルグに次ぎ第二位を占む。一着との差二十米。

十四日 天気甚だ快し。朝来より皆盛んにテニスをなす。藻岩方面に秋色を探りに出掛ける者多し。藻岩の紅葉今見頃なり。

宮下、四百米競泳にて力戦す。一、アルネボルグ、二、宮下、差三米

十五日 工学部試験始る。土居君雀躍活躍す。

十六日 本日晝食後、落葉を山と積んで、之を焚きて消火器の機能の試験を行ふ。成績良好なり。平川君曰く“落ち付いてゆっくりやれば少し位の火事なら何ともない”

十七日 本日は新嘗祭なり。朝来、林間に紅葉をたいて芋を焼く風流なるをのこ盛んに活躍す。蓋し風流漢の増加は、食事部の恐慌なり。朝間テニス盛んなり、試験中なる土居君活躍す。君の余裕と悠々迫まらざる態度、賞讃の値あり。又以って他山の石となすに足るものか？午後野球をなすものあり。埼玉寮より来る二十一日を期してピンポンの試合の申込みあり。

十八日 よき日なり。此頃の秋色愛す可し。殊に植物園は諦視し、傾聴し、黙想するに手頃の処なり、但し日曜祭日此の限りに非らずと知る可し。

文芸部左の広告をなす。

一、記念祭々歌募集期日を二十一日迄延期す。

一、楓林原稿切本月三十一日限りとす。

十九日 本日電温急激に低下す、夜に入りて甚し。

二十一日 朝間曇り勝ちにて寒し。午後埼玉寄宿舎にピンポンの試合に赴く。我が軍のメンバー及び試合結果左の如し。（略）

優退二組宛を出して対となり、時間の都合に依り決勝を行わずして引分けとなる。

尚埼玉対秋田の試合ありて、之も引分けとなりて終る。終りて後、汁粉、菓子の御馳走あり、各自、自己紹介をなす。各副舎長の挨拶あり各々歡をつくし五時過帰舎す。

二十二日（月）中央講堂にて賀川豊彦氏の「宗教の本質」と題する講演ありたり。本日を以って工科の試験終る。

二十三日（火）農学実科の試験始る。

二十四日（水）眞に北海道らしき玲瓏なる秋日なり。舎生中、美と思案を求めて近郊を逍遙する者多し。夜、余興部の相談会を開く。而して「同志の人々」（但し古本）を購入する。

二十五日（木）決算をなす。今月は一日六十六銭なり。本日より一号室を余興部屋にする。余興部朗読会。月光うるはし。

二十六日（金）秋らしき朝曇よとみるあに、大雨轟然として至り、天日ために暗しかな。直に晴れて気持よき日となる。

大根八百本至る。一人につき五十本宛洗ふことになり、半分は本日中に洗われたり。

記念祭のハーモニカバンドが猛練を始め、饗応部が相談を始める等、次第に記念祭気分漲り来る。

二十七日（土）快晴、大根を洗ふ。余興部は買出しにゆけり。六時半より奥田良三氏独唱会あり、ゆける者多し。

二十八日（日）水産専門部一年寺岡君入舎せらる。相変らずの快晴にて人出多し。円山の秋色最も美なり。ハーモニカの猛練ありたり。

二十九日（月）工学部の試験終る。

三十日（火）実科の試験終る。記念祭歌、平戸君によりて作られ平川君に作曲を依頼す。

十一月三日（土）本日は明治節にして我舎の三十一年記念祭日なり。各部は夫々その最善をつくせり。午後四時、平川副舎長によりて記念式の開会は宣せられ、一同記念祭歌を合唱せり。後、新入舎生寺岡君の挨拶あり。先輩を代表して鈴木氏、舎生を代表して笹部君夫々祝辞を述べらる。次に先生の御訓話あり、明治大帝の徳を讃えらる。平川副舎長、祝電を披露し、先生の御発声にて舎の万才を、副舎長の発声にて先生の万才をとなへて式を閉ず。本日は在札の先輩の外に、八雲在住の上野先輩を迎へ得てうれしかりき。

五時半より晩餐会を持つ。先生はじめ多くの先輩十余名を迎へ、饗宴部が馬力をかけたる支那料理その他に舌鼓を打ち、雑談に花を咲かせたり。デザートに入るや余興部と装飾部合同の福引をやりたり。六時半頃記念撮影をなす。七時より余興を開始す。

余興部のダシモノは山本有三作「本尊」。武者小路作「カチカチ山」。成功せざりき。

本年は先輩の飛入りなく、十時に閉会せり。

かくして楽しき記念祭も逝きぬ

十一月五日（月）ストーブ取付けたり。

六日（火）天皇陛下、京都へ行幸せらる。次第に御大典気分漲り来る。

十日（土）御即位式。学校は休校となる。

十一日（日）雪降りしきりて二、三寸積む。

村津、三島の両君、スキーの誘惑にたまりかね、物置より旧きアルパインスキーをとり出して、前庭に転び得意然たり。荒廃の稚氣や愛すべし。

十四日（水）本日は大嘗祭につき休校なり。

十六日（金）大饗宴第一日目につき休校。

テニスの打おさめをなす。「田舎ベース」と称するものをなす者多し。

十七日（土）幸多き小春日和。荒廃せるテニスコートで野球をやる。時に東西対抗試合をやらんと議おこり、ここに開戦。

メンバーは次の如し。

東 | 投手 川原 | 捕手 笹部 | I 広瀬 | III 子供 |

西 | II 土居 | II 平川 | I 三島 | III 村津 |

四対二で西の勝ちに帰す。本科対予科は、本科の老練に予科屈服す。

二十一日（水）降雨激しく、加え雷を伴いて壮観なりき。北海道でかゝる時候に雷きたるは稀なる事なり。

二十二日（木）昨日の名残り去らず大暴風なり。

二十三日（金）本日の特筆事件は左の如し。

舎の早起の暁将畑君、八時に近くなるも起きず。同室の相棒にして晩起きの、之又暁将なる三島ヤンピン氏、今朝は珍しくも七時に起きて昂然として曰く「畑君の朝寝姿を初めて拝見した」と。之を聞いて傍の者「今日は雨が降らねばよいが」だと。

二十六日（月）總長の授爵祝賀会公開堂でひらかる。

二十七日（火）朝、裏の細き枯枝にかゝった月が麗しかった。川原君、風邪の為臥床。

君の速かに回復せられん事を祈る。

二十八日（水）天皇陛下、東京へ御還幸あらせらる。

十二月一日（土）雪五、六寸積む。舎の熱心党村津、三島、広瀬の三君午後円山へ遠征。（村津、三島の二君の再度の遠征なり）

夜、月次会あり。委員、畑、後藤、平戸の諸君。晚餐は牛鍋をつゝいてあつさりすます。

七時半より会を始む。今晚は先生、御風邪気味にて御出なく、亀井先輩一人で淋しい。

副舎長の挨拶に次ぎ、医科一年目渡辺君の入舎挨拶あり。土居君、渡辺君と寮で隣合せだった事から君を紹介す。

笹部君—医学的見地から青春期を観察し、暗に熱心党の連中を警告す。

平戸君—渡辺君の歓迎の辞を述べ、スキー礼讃をやる。

その他ほとんど凡ての諸君が歓迎の辞をのべた。次に亀井先輩立てて、本科マンが、他に自由に勉強出来る下宿あるにも関らず舎のために盡されえるのは涙ぐましい状景なりと述べられて降壇。茶菓を食ひかつ飲んで、ストーブの囲りに雑談せり。後、へボ抜きをやって二対一で西の勝ち。今晚委員改選をなせるが、その結果左の如し。（略）

十二月二日（日）渡辺君（医科一年目）八号に入舎せらる。

四日（火）文武会問題について学校との意見相違し、交渉決裂。学生生徒七百余は中央講堂に集会し、午後七時遂に同盟休校を決議す。同盟休校の目的は、今回の交渉の犠牲となりて放學せられたる工学部機械科三年目の前田英彦君の復學のためなり。

五日（水）工・医の一部を除きては皆ストライキに参加、各々入口を固めて登校を阻止す。
午後一時よりグラウンドに学生大会開かれ、激昂せる学生と、主事、学生監、警官との間に小競合を演ぜり。西条、山田の二君は更に放学され、東君は停学さる。

六日（木）依然ストライキ継続。各自入口を固む。

七日（金）予科、水産は更に犠牲を出すなら総退学すべき事を声明し、皆退学届を準備せりとか。流言ひ語縦横に飛び交ひ、各自真相を知らずして軽挙盲動するかの如き感を抱かしむ。（因みに云ふ、筆者は初めよりストライキ反対者なり。）随所に各クラス会ひらかれたり。

八日（土）医学部は一年目を除き全部ストライキより脱退。依然入口を固める。

九日（日）総長帰学。学生、生徒軟化の徴表る。近頃は十二時以後に歩いてると尾行がつく由。

十日（月）別紙の如き総長訓辞配達さる。老境の総長の心事を憶う者、誰か涙一掬の情なからんや？予科及び水産軟化す。強硬（むしろ頑冥と云はん）なるは農学部のみ。
夜九時半の急行で笹部、壺多量君帰省さる。本日より三日間臨時休校する旨発表さる。

十一日（火）スキーに赴く者多し。而も一方大学は暗雲低迷せりかな。

十二日（水）農学部を除く外は全部登校することになる。農学部は学生大会を開き慎重協議の結果、ストライキによらざる他の方法による事にして明日より登校する事を決議し、こゝに九日にわたるストライキは了決せり。

十四日（金）澄切った音を響かせてエルムの鐘が鳴る。平和克服の喜びが自ら響きわたる。
予、農、医、水はもう授業がないとか。

十五日（土）総長の訓辞ありたり。夜、送別の牛鍋をつゝく。

十六日（日）畑君朝の急行で帰省。本間君、十二時十八分の奴で帰省さる。

十九日（水）野村君山岳部合宿に正午出発。

二十日（木）広瀬、三島、村津君スキー合宿ニ青山温泉ニ総長出発。三君ノスキー熟達ヲ希望ス。土居君突然今晚七時札幌発ニテ帰省サル。

二十三日（日）平戸、大塚、川原君ハ手稲登山ヲ決行ス。

二十四日 昨日ノ手稲登山一行ノお千尺高地ヨリノ消息「北海タイムス」ニ掲載されたるは珍妙ナリ。

二十五日 平戸君手稲ニ行カル。

二十六日（水）今晚、スキー合宿ヨリ広瀬、三島、村津君帰ル、皆黒クナル、就中広瀬君第一位ナリ。

三十日（月）平戸君奥手稲ニ行カル。
今朝八時ヨリ例年ノ如ク「餅ツキ」ヲ行フ、
蓋モ例年ニ比シ碩ル遅シ。今朝トイエドモ九時頃ニノコ※※起出ゲタルモノアリ。
前田君ヨリ一白ツキ上ゲタル者ニ対スル賞出ズ。其ノ最初ノ獲得者ハ川原君、次ニ本間君大イニ頑張りテ之ヲ得、村津君ニ白ツキ上ゲル。前田君テレテ、ハラ※※セシム。

舎前ニ飛躍台ヲ作ル。夜先輩石澤達夫氏ノ追悼会ヲ行フ。今年ニテ八周年トノ事ナリ。
石澤未亡人ヨリハ静岡名産ノ蜜柑ヲ贈ラレタリ。

三十一日（月）本日を以て今年も永劫に去らんとす。回顧すれば多事なる一年なり。其の間に於ける吾人は如何！！顧みて敢て恥じざるほどの獲る所ある者、然らざる者、一様ならざる可し。而れども昭和参年は永久に再来せず、既往は追はず、来らん新年を迎えて大いに奮斗すべし。今宵皆去り行く昭和参年をしのばんとて、二号にて歡談に時を過す。昭和参年最後の頑張りをなして皆、除夜の鐘を聞くまで起く。蓋し、JOAKにて鶏鳴、百八の鐘の放送ある故なり。